

アーサー・ビナードと谷本清平和賞

—— 絵本と紙芝居の果たす役割を考える ——

林 伸 一

1. はじめに

2020年9月28日 米国出身で広島市在住のアーサー・ビナード氏が、谷本清平和賞を受賞したことが報じられた。ビナード氏は、2001年に詩集『釣り上げては』で中原中也賞を受賞してから、目覚ましい活躍を続けている。(林2020a参照)

詩人、絵本作家、翻訳者という顔だけでなく、ラジオ・パーソナリティーとしての顔を持っている。文化放送のラジオ番組「アーサー・ビナード午後の三枚おろし」を2017年以来担当している。山口県では、山口放送（KRY）が15:30～15:40『お昼はZENKAIラヂオな時間』内で同番組を配信していたが、2019年10月以降、配信が止まっている。

2. 谷本清平和賞受賞報道について

共同通信社は、9月末にアーサー・ビナード氏の受賞を次のように報じている。

公益財団法人「ヒロシマ・ピース・センター」（広島市）は28日、平和活動に貢献した個人や団体に贈る「第32回谷本清平和賞」に、核の脅威を訴える詩や絵本を数多く生み出してきた米国出身で広島市在住の詩人アーサー・ビナード氏（53）を選んだと発表した。

母国の大学を卒業後、日本語を学ぶため1990年来日。日本語での詩作や翻訳活動をしていた2006年、米国による太平洋・ビキニ環礁水爆実験で被ばくした日本漁船の体験を描いた『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）を出版。第12回日本絵本賞を受賞した。



この記事の読者は、ビナード氏が『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』を書いたから谷本清平和賞を受賞したと早合点してしまうのではないだろうか。無論同書が、ビナード氏の反核を訴える原点とも言える作品であることは確かである。

「ヒロシマ・ピース・センター」は、ビナード氏が紙芝居や絵本などの作品を通し、核兵器廃絶と恒久平和実現を深く訴え続けていることを評価している。ビナード氏の『さがしています』（2012年、童心社）、絵本『ドームがたり』（2017

年、玉川大学出版部)、紙芝居『ちっちゃいこえ』(2019年、童心社)などが、同平和賞を受賞した大きな要素だと思われる。

3. 2012年『さがしています』から2017年『ドームがたり』へ

東京に出版・放送・取材活動の拠点を置きながらも、2011年から広島に住むようになったきっかけは、ビナード氏の『さがしています』の制作に打ち込むことができるようにするためであったと聞く。

戦後75年を経て、広島での原爆の被爆体験を語るカタリベの高齢化が進み、原爆の悲惨さや戦争の惨禍を直接伝えることが難しくなっている。そのような中で、平和記念資料館に保存されている被爆者の遺品に被爆体験を語ってもらおうと『さがしています』の制作が企画され、岡倉禎志氏の写真にビナード氏が詩をつけていく形で同書が作られた。(詳細は、林2020a参照)



そのような活動をしていくうちに原爆ドームそのものに語ってもらおうと『ドームがたり』の絵本製作が始まった。「広島駅から路面電車に乗って『原爆ドーム前』で降り立ち、丸い頭の骨を見あげた瞬間、原爆が落とされる前はどうかだったのか、知りたくなった」とビナード氏は、絵本のあとがきに書いている。原爆ドームを擬人化して、丸い屋根を頭に建物の残存した部分を骨に見たてて、語らせようと思ったところが、詩人の創造力の逞しさであろう。同書は、第23回日本絵本賞を受賞している。



「広島県物産陳列館」だったものが、15年に渡る日中戦争下に「広島県産業奨励館」になり、戦後は「原爆ドーム」になった建物に対して、ビナード氏は、「原爆というラストネームと、ドームのファーストネームに、本当は納得していない」と想像したりする。

ガイドブックを見て、原爆ドームの世界遺産登録の名称が「広島平和記念碑」であることを知ったり、修学旅行で原爆ドームや平和記念資料館を訪れ、原爆の悲惨さや戦争の惨禍の一端を垣間見ることになる。勝手に「原爆ドーム」と命名されたドーム君が、戦前・戦中・戦後のことを物語ってくれたなら、大いに説得力があるカタリベになるだろう。(『さがしています』のあとがきで、ビナード氏がカタリベと表記)

核エネルギーの軍事利用が原子爆弾であり、平和利用が原子力発電であるとされてきた。そこから、原爆には反対だが、原発には賛成とする人が出てきた。

しかし、「爆抜き原爆装置」を「原子炉」と名付け、その熱の「湯沸かし機能」を利用する附属品の「発電機」をつけて、「原子力発電所」として売り込みを始めたビナード氏は、見ている。(アーサー・ビナード『ドームがたり』あとがき参照)

4. ラジオ番組「アーサー・ビナード午後の三枚おろし」

山口放送（KRY）で2019年10月以降、「アーサー・ビナード午後の三枚おろし」の配信が止まったままになっているのには、次のようないきさつがある。

同年4月に山口の朗読屋さんが「アーサー・ビナードとともに平和を考える朗読＋お話会」を企画し、山口県立図書館と共催で実施しようとしたところ、同図書館の館長から待ったがかり、同館での実施はできなかった。その理由は、賛否両論ある原子力発電にビナード氏が反対しているのもので、そのような人を図書館が講師として呼ぶわけにはいかないからというものであった。

ただし、「アーサー・ビナードとともに平和を考える朗読＋お話会」の企画自体が断念されたわけではなく、同年8月11日に小郡ふれあいセンターで100名の参加者を得て、実施された。(詳細は、林2020a参照)

その後援団体には、山口市教育委員会をはじめ公益財団法人山口文化振興財団、中也記念館などが名を連ねている。(詳細は、林2020a参照)

以上のいきさつを9月末にビナード氏が、文化放送の「午後の三枚おろし」の番組中で話したところ、山口放送（KRY）での配信が何の予告もなく、ピタッと止まってしまった。同番組の放送は数日の時間差があるため、山口県民には届かないまま、放送打ち切りとなってしまった。

9月から始まった「アーサー・ビナード研究会」が放送打ち切りの理由の開示と放送の再開を求めて、署名を添えて山口放送（KRY）に申し入れを行ったが、聞き入れられず、すでに1年以上が経過している。

2020年のビナード氏の谷本清平和賞受賞を機に再開されるメドもなさそうである。

2020年9月末の時点で、ビナード氏の谷本清平和賞受賞を報じたのは、NHK広島局と共同通信社の記事を転載した「秋田魁新報社」など地方の新聞社だけであった。

5. NHK広島局の報道

9月末にNHK広島局は、ビナード氏の谷本清平和賞受賞を次のように報じている。「ビナードさんは9年前から広島市で生活しながら被爆者を取材し、みずから制作した詩や絵本、それに紙芝居を通じて核兵器の廃絶や平和について訴え続けています。そのうち、7年かけて制作した紙芝居『ちっちゃいこえ』は、広島に投下された原爆によっ

て細胞が破壊されていく様子を表現していて、自ら全国各地を訪れて紙芝居を披露しています。

受賞についてビナードさんは、『おおきな役割を果たした谷本清牧師が築いた土台の上で活動してきたが、受賞によって谷本牧師とつながりを持てたことは光栄です。今後はさらに表現方法を工夫して広島の実態に出会っていない人たちに原爆の悲惨さを伝えていきたい』と話しています。(NHK広島NEWS WEB 2020年9月28日より)

6. 紙芝居『ちっちゃいこえ』について



ビナード氏初の紙芝居作品であり、丸木俊・丸木位里さんの絵「原爆の囃」をもとに、ビナード氏によって再構成された。紙芝居の中でじいちゃんが歌う「ぼうや ねんね ねんねしな。父さん つよい 兵隊さん…」という子守唄があるが、それは戦時中に「軍国子守唄」として実際に歌われていたものをもとにしているとのことであった。今でも当時の音源をたどることはできるが、紙芝居裏面の下の演出ノートには、「大きめの声で、自由に節をつけてうたう」とある。

ネコが語るという設定ではじまり、家族のことや命をつくりつづける体の中のちっちゃい声のこと、ヒロシマのことなどが話される。わたしたちはどうすれば生きていけるのか？ 絵が語りかける内容に、一人ひとりが耳をすます紙芝居になっている。(初版：2019年5月20日 サイズ：26.5×38.2cm 16場面、「童心社」発行)

ビナード氏は、紙芝居との出会いを次のように述べている。

「人生で初めて紙芝居に遭遇したのは23歳のときだ。場所は東京池袋図書館。来日したばかりのぼくは、池袋に部屋を見つけて、毎日のように図書館の児童書コーナーに入りびたり、絵本をいっしょうけんめい読んでいた。(中略) 子どものために開かれる『おはなしたんぼほ』という催しに、日本語ビギナーのぼくの参加も特別に許された。テーブルの上に木の箱が置かれ、扉が左右に開くと、いきなり舞台に変身した。ページがめくられていくのではなく、絵が一枚ずつ抜かれて、昔話はどんどん進んだ。ぐいぐいひきこまれてぼくは夢中になった」。(紙芝居の中の解説コラムより)

7. 「ヒロシマ・ピース・センター」と谷本清平和賞受賞者

公益財団法人「ヒロシマ・ピース・センター」は、被爆者支援に尽くした広島流川教会の故谷本清牧師の遺志を受け継ぎ、1987年に創設された。以下に第1回～第31回の谷本清平和賞受賞者を示す。(同センターのホームページ、Wikipediaなど参照)

7-1. 第1回～第31回の谷本清平和賞受賞者

- 第1回 1987年 ノーマン・カズンズ（米国・カリフォルニア大学教授・平和運動家）
- 第2回 1988年 フロイド・シュモー（米国・森林学者・平和運動家）
- 第3回 1990年 栗原貞子（詩人・原爆詩「生ましめんかな」の作者）
- 第4回 1991年 森滝市郎（広島大学名誉教授・平和運動家）
- 第5回 1992年 今堀誠二（広島女子大学学長・広島大学名誉教授・平和思想家）
- 第6回 1994年 ジョン・ハーシー（米国・報道作家・「ヒロシマ」の著者）
- 第7回 1995年 ヒロシマを語る会（原爆体験者の団体－代表・原広司）
- 第8回 1996年 金信煥（在日大韓・広島教会名誉牧師・在韓被爆者救援活動家）
- 第9回 1997年 村井志摩子（劇作家・演出家・「広島の上上演委員会」創設者）
- 第10回 1998年 江口保（公立中学校教師・「ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会」主宰者）
- 第11回 1999年 伊藤隆弘（元舟入高校校長・原爆劇作家・演出家）
- 第12回 2000年 ワールド・フрендシップ・センター（海外との平和使節団交換プログラム－代表・森本弘）
- 第13回 2001年 河本一郎（「広島折鶴の会」結成者）
- 第14回 2002年 中沢啓治（漫画家・「はだしのゲン」の作者）
- 第15回 2003年 吉永小百合（女優・原爆詩朗読者）
- 第16回 2004年 平岡敬（元広島市長）
- 第17回 2005年 新藤兼人（映画監督）
- 第18回 2006年 学校法人広島女学院（教育団体）
- 第19回 2007年 在韓被爆者渡日治療広島委員会（市民団体－会長・河村病院院長 河村讓）
- 第20回 2008年 高橋昭博（被爆体験証言者・元広島平和記念資料館長）
- 第21回 2009年 平野伸人（元全国被爆二世団体連絡協議会会長）
- 第22回 2010年 夏の会（女優たちの原爆手記朗読劇）
- 第23回 2011年 坪井直（被爆体験証言者・日本原水爆被害者団体協議会代表委員）
- 第24回 2012年 碓井静照（元広島県医師会会長・元IPPNW日本支部長）（注1）
- 第25回 2013年 小倉桂子（被爆体験証言者・平和のためのヒロシマ通訳者グループ代表）
- 第26回 2014年 サーロー節子（被爆体験証言者、カナダ・トロント市在住）
- 第27回 2015年 秋葉忠利（元広島市長）
- 第28回 2016年 ピーターソンひろみ（平和スカラシップ、米国・ホノルル市在住）

第29回 2017年 原爆の図丸木美術館

第30回 2018年 森滝春子（市民団体「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」共同代表）

第31回 2019年 矢川光則（ピアノ調律師（被爆ピアノ））

（注1）PPNWは、核戦争防止国際医師会議

ビナード氏は、外国人として5人目の受賞、アメリカ人としては4人目、26年ぶりの受賞である。ビナード氏は、「強い探求心と鋭い感情で、被爆者たちの声をくみ上げ、多彩な文芸作品を創出。ピカドンを後世に伝えるアメリカ人語り部」と評された。（中国新聞、2020年11月10日・朝刊より）

第14回の中沢啓治（1939〈昭和14〉年－2012〈平成24〉年、享年73歳）は広島に落とされた原子爆弾（原爆）で被爆した子どもが力強く生きる姿を描いた漫画「はだしのゲン」の作者として知られている。「人類にとって最高の宝は平和です」という信念を貫き、各地で被爆体験を語り続けた。自伝『はだしのゲン わたしの遺書』（朝日学生新聞社刊、全224頁）が2012年に発行されている。絵本『はだしのゲン』（英日対訳版）も2013年、Elizabeth Baldwin訳でDINO BOXより発行されている。

2013年島根県松江市教育委員会（清水伸夫教育長）が漫画「はだしのゲン」を市内の小中学校の児童、生徒に見せないよう閲覧制限要請していた問題は、多くの批判の声があがり、教育委員会議で市教委の要請は撤回された。

第15回受賞者の吉永小百合は、女優としてだけでなく、長年にわたって原爆詩朗読者として知られている。全国各地で原爆詩「生まれめんかな」などを朗読し、被爆者を鎮魂し、原爆の惨状を伝え、反核平和実現を訴えている。

第17回（2005年）に新藤兼人（映画監督）が受賞している。「原爆の子」等多くの映像を通じて、戦争の悲惨さと核の恐怖を訴え、平和を希求した。

第31回（2019年）の谷本清平和賞の受賞者は、矢川光則氏（ピアノ調律師）で被爆ピアノを蘇らせたことでテレビなどのニュースでも取り上げられている。

7-2. 吉永小百合とアーサー・ビナードの接点

広島を舞台にした『愛と死の記録』（1966）の出演や、『夢千代日記』（1981）で原爆症に苦しむ主人公を演じたことをきっかけに、1986年から吉永小百合は、ボランティアで原爆詩の朗読会をスタートさせている。以後女優としての活動のほか、反戦・反核運動をライフワークとして力点を置いている。（Wikipedia吉永小百合・参照）

『小さな祈り 全詩英訳』（男鹿和雄・画／汐文社1998）は、吉永小百合の編集による詩画集である。

2002年吉永小百合は、平和記念資料館（広島市）に導入された音声ガイドのナレーションをボランティアで担当した。

2005年 第56回NHK紅白歌合戦では、山梨県からの中継で原爆詩を朗読した。

吉永小百合は、以前から脱原発を求めているが、福島第一原子力発電所事故後はその姿勢を一層強めている。

2011年7月31日に広島国際会議場の原爆詩朗読会（日本母親大会の特別企画）では「世の中から核兵器、原子力発電所がなくなってほしい」と訴えた。

『吉永小百合、オックスフォード大学で原爆詩を読む』は、早川敦子による取材・構成作品で、集英社から2012年に発行されている。

2014年には、『ヒロシマの風－伝えたい、原爆のこと－』が角川つばさ文庫として、KADOKAWAから吉永小百合・編／男鹿和雄・カバー絵・挿絵／YUME・挿絵／山室有紀子・文（第一部）／早川敦子・監修協力で出されている。横浜に住む小学四年生のみどりが、広島に暮らすおばあちゃんの病気をきっかけに、原爆のことを考えはじめるといった内容。現代の小学生の目線で原爆を追体験する書き下ろしストーリーと、実際に原爆を体験した人たちが作った原爆詩20編が収録されている。

2015年12月9日（水）夜8時から9時 文化放送は『戦後70年企画～アーサー・ビナード



ド 長崎原爆を探して』という報道特別番組を放送した。文化放送では戦後70年企画として、同年4月から毎週土曜日に「アーサー・ビナード 探しています」という10分番組（4月のみ15分番組）を放送していたが、その特別版として「長崎原爆」を主要なテーマとして放送された。

同じく「長崎原爆」をテーマに製作された映画が12月12日から公開された。それは、山田洋次監督、吉永小百合主演『母と暮らせば』で、特番では吉永小百合がゲストとして招かれて「長崎」と「原爆」に関する想いを語った。文化放送は賓客待遇で吉永小百合を出迎えた。（<http://www.joqr.co.jp/hodo/2015/12/post-600.html>参照）

吉永小百合の著作物としては、詩画集『第二楽章－福島への思い－』（スタジオジブリ 2015／吉永小百合・編／男鹿和雄・画）がある。同名の『第二楽章－ヒロシマの風 長崎から－』（スタジオジブリ 2015／吉永小百合・編／男鹿和雄・画）もある。

2016年には、東京都千代田区の如水会館で第1回目の「澄和（とわ）フューチャリスト賞」（毎日新聞社後援）が吉永小百合に授与された。同賞は市民目線の平和関連活動に地道に取り組んでいる個人や団体を一般財団法人「澄和」が顕彰するもの。

1986年から原爆詩の朗読を続けてきた吉永小百合は、30年の節目の年の受賞に感慨

深げに次のように挨拶している。

「被爆者の方からの依頼で始めたものですが、朗読して私自身も感動し、もっともっと多くの方に聴いていただきたいとの思いで続けてきました。今日を精いっぱい生きることがあしたにつながる。そんな思いで今後も続けていきます」。

(<https://www.sponichi.co.jp/entertainment/news/2016/10/28/スポニチannex>参照)

7-3. 新藤兼人とアーサー・ビナードの接点

新藤兼人（1912<明治45>年-2012<平成24>年）は、映画監督・脚本家として、表現の自由と思想の自由を、とことん追求した監督である。享年100歳。

日本のインディペンデント映画の先駆者であり、性のタブーに挑戦したり社会派映画を制作したりと、冒険的な作品を発表した。『鉄輪（かなわ）』のように前衛的な作品まで制作した。脚本作品も、約370本と非常に多い。（近代映画協会会長、広島県名誉県民、広島市名誉市民、広島県三原市名誉市民）。

1952（昭和27）年、近代映画協会初の自主制作作品として、原子爆弾を取り上げた映画『原爆の子』を発表。長崎原爆に関しては1950年『長崎の鐘』で脚本を担当している。1959（昭和34）年に『第五福竜丸』を発表したが、興行的には失敗に終わり、近代映画協会には多額の借金が残り、解散の危機に陥った。

写真の右端は久保山愛吉役の宇野重吉（主演）である。



ビナード氏が『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』を出したことと新藤兼人が映画『第五福竜丸』をつくったことが、谷本清平和賞という接点でつながっているように思われる。

7-4. サーロー節子氏について

谷本清平和賞受賞者には、第26回（2014年）にサーロー節子氏（被爆体験証言者、カナダ・トロント市在住）がいる。2017年にサーロー節子氏は、国連で演説し、核兵器禁止条約が採択された。当条約は1996年4月に起草され、2017年7月に国連総会で賛成多数にて採択され、2020年10月に発効に必要な50カ国の批准に達したため、2021年1月22日に発効した。しかし、日本政府は同条約をいまだに批准していない。

サーロー節子氏は、国連での核兵器禁止条約採択に貢献したことにより、ご褒美に谷本清平和賞を受賞されたのではなく、それまでの被爆体験証言者としての活動が評価され、受賞したのである。

7-5. 公益財団法人原爆の図丸木美術館とアーサー・ビナードの接点

第29回の公益財団法人原爆の図丸木美術館は、丸木俊・丸木位里共同制作の「原爆の図」の永久保存と社会的な芸術・文化活動を通じて平和の創造に寄与している。

前述のビナード氏初の紙芝居作品『ちっちゃいこえ』も丸木俊・丸木位里の「原爆の図」をもとに、再構成された点に注目すると谷本清平和賞という接点でつながっているように思われる。

8. アーサー・ビナード研究会

「山口の朗読屋さん」は、その活動の一部として次の事を行ってきた。

- ① 2019年8月11日に「アーサー・ビナードとともに平和を考える朗読会」開催。
- ② 2019年10月12日から隔月ごとに「アーサー・ビナード研究会」を3回実施。
- ③ 児童館や高齢者施設などでアーサー・ビナードの作品を朗読して紹介。

2020年4月からは、「山口の朗読屋さん（街の朗読屋さん）」から、組織的にも活動形態も独立させた形で「アーサー・ビナード研究会」を運営していくこととなった。ただし、「山口の朗読屋さん(街の朗読屋さん)」とは、密接に連携していく予定である。

2020年度は、山口県観光スポーツ文化振興課を窓口とする明日の文化人育成プロジェクトに「アーサー・ビナード研究会」（代表：金崎清子）として「やまぐち若手文化人等スキルアップ支援事業」の助成申請を行ない、5月に採択された。

2020年度のアーサー・ビナード研究会の基本方針

- ① アーサー・ビナード研究会月例会（月に一回2時～4時）会場：山口児童館
- ② アーサー・ビナード氏を招いての公開朗読会＋お話し会（年1回）
紙芝居『ちっちゃいこえ』絵本『父さんがかえる日まで』
『そもそもオリンピック』朗読と講演会：7月20日、山口児童館2階集会室
- ③ 香月泰男『シベリアの豆の木』の朗読会・紙芝居「ジャックと豆の木」
福田百合子先生が香月泰男を語る集い
日時場所：2021年1月30日、山口市菜香亭（山口市天花1-2-7）

アーサー・ビナード研究会（代表：金崎清子）

事務局：山口の朗読屋さん（事務局長：林 伸一）

〒753-0815 山口市維新公園1-12-5

☎090-6415-8203

8-1. アーサー・ビナード研究会例会

アーサー・ビナード研究会は、ビナード氏の絵本・翻訳本・詩集・紙芝居などを持ち寄って、ブック・トーク形式の朗読カフェとして行なうこととした。ビナード氏の作品は、すでに70点以上あり、図書館でアーサーさんの作品をさがして、作品を素材に語り合うことを呼びかけた。第1回から3回までは、山口の朗読屋さんが主催で、隔月の開催であったが、第4回からは、アーサー・ビナード研究会（代表：金崎清子）が主催で、毎月一回の開催となった。ビナード氏の作品に親しみ、味わう機会をつくり、会員にとどまらず、広くブック・トーク形式や朗読カフェの形式で研究会を実施していく集まりである。

<第1回 2019年10月12日（土）> 朗読カフェ・会場：山口児童館 13人参加

午後1時～4時、一人5分のブック・トーク形式で、自己紹介とともに各自が持ち寄ったビナード氏の作品が紹介された。紙芝居『ちっちゃいこえ』も上演された。

8月11日の「アーサー・ビナードとともに平和を考える朗読+お話会」に参加した100名に葉書で事前に告知した。

<第2回 2019年12月14日（土）> 朗読カフェ・会場：山口児童館 13人参加

午後1時～4時、一人5分のブック・トーク形式で、自己紹介とともに次のような本が紹介された。

新作絵本『父さんがかえる日まで』（モーリス・センダック作・偕成社）『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』『さがしています』『はじまりの日』『プレッツェルのはじまり』『キンコンカンせんそう』『どんなきぶん』『すばらしいみんな』『雨ニモマケズ』『はらのなかのはらっぱで』『日々の非常口』『わたしの森に』ほか。

<第3回 2020年2月15日（土）> 朗読カフェ・会場：山口児童館 15人参加

午後1時～4時、一人5分のブック・トーク形式で、自己紹介とともに次のような本が紹介された。

『わたしの森に』『亜米利加ニモ負ケズ』『不思議の国のアリス』『いちばんのなかよしさん』『詩の風景 ゴミの日』『わたしの森に』『カエルもヒキガエルもうたえる』『ドームがたり』『なずずこのっぺ?』『ことばメガネ』『もしも、詩があったら』ほか。

当日は、山口児童館館長の石丸義臣氏の「すばらしいみんな」と『はじまりの日』からフォーエバーヤングの唄がギターの弾き語りで披露された。

<第4回 2020年4月18日(土)> 午後1時~4時 朗読カフェ 7名参加

第4回目のアーサー・ビナード研究会は、会場に予定していた山口児童館が、新型コロナウイルスの感染予防対策で休館になってしまったために、急きょ「ギャラリーカフェつるかめ」に会場を変更して実施された。次のような作品が紹介された。

『父さんがかえる日まで』のリレー朗読、『カエルもヒキガエルもうたえる』の夢分析、『そもそもオリンピック』『あつまるアニマル』。宇部市のえんぴつ画家の岡本正和氏による絵本『くうきのかお』の中の蛙、葛飾北斎の絵などについての解説があった。

<第5回 2020年5月18日(月)> 午後2時~4時 つるかめ 12名参加

コロナ禍で緊急避難的に前回同様「ギャラリーカフェつるかめ」を会場として実施され、次のような作品のリレー朗読と夢分析が試みられた。

『あつまるアニマル』、『そもそもオリンピック』の中の風の夢分析を行なった。

また、石丸館長による「仮説としてのアーサー・ビナードの世界」の発表と菅原克己の「ブラザー軒」の唄がギターの弾き語りで披露された。

<第6回 2020年6月29日(月)> 午後2時~4時 会場：山口児童館 15名参加

山口児童館に会場をもどして実施され、次のような作品が紹介された。

『ホットケーキできあがり!』『釣り上げては』から「鼻唄」「タッグ」「夏の或る日曜日」「バナナ」、『焼かれた魚』『この本をかくして』『山のディスコ』ほか。

また、石丸館長による山之内猷の「生活の柄」、三木卓の「系図」、菅原克己の「ブラザー軒」の唄がギターの弾き語りで披露された。

当日は、山口新聞の取材を受け、次のような記事が掲載された。

山口でアーサー・ビナード研究会
絵本持ち寄り語り合う

米国出身の絵本作家、アーサー・ビナードさんの作品について語り合う「アーサー・ビナード研究会」が29日、山口市下堅小路の山口児童館であり、15人が参加した。

昨年8月に市内で本人を招いた朗読会を開催したことをきっかけに、定期的に



た絵本を持ち寄り、1人ずつ作品の内容や魅力を語った。詩の朗読もあった。

ビナードさん英訳の「焼かれた魚」を紹介した同市小郡大江町の岡村久美子さん(73)は「朗読に取り組みようになつてビナードさんの作品に触れるようになった。発想が面白いところが好き」と話した。

次回は7月20日に同館で開催。

アーサー・ビナードさん翻訳の絵本を紹介する参加者
29日、山口市下堅小路

開いている。
「この本をかくして」「イツツ・ア・スモールワールドみんななどなりどうし」などビナードさんが日本語で書いた絵本や他の作家の作品をビナードさんが翻訳した。

山口新聞 2020年6月30日付け記事 (18面)

<第7回 2020年7月20日(月)> 13:30~16:30

テーマ：アーサー・ビナードが下豎小路にやってくる！

会場：山口児童館 参加無料 事前予約制で実施

ビナード氏が次の3作品について話をしてくれた。

絵本『父さんがかえる日まで』、紙芝居『ちっちゃいこえ』

絵本『そもそもオリンピック』(リレー朗読)。ビナード氏

は『父さんがかえる日まで』のセンダックの英語の原文も朗読してくれた。

このように2019年に引き続き、2020年にもビナード氏は、山口市を訪れ、朗読会とお話会を実施してくれている。2020年は、コロナ禍にあったこともあり、参加人数は33名で、報道してくれた長周新聞社も一社だけであった。



2020年7月20日 山口児童館2階集会室時間進行表

時間	作品・内容	所要時間	担当
13:00	開場：受付開始(西村・荒井・岡村)	誘導：田中	展示書籍係：内藤
13:30	開会・林事務局長挨拶・司会：金崎会長	会員紹介	講師紹介
13:40	絵本『父さんがかえる日まで』 (岡村➡金崎➡荒井➡内藤)	7分	アーサー・ビナード氏の話 (33分)
14:20	休憩(本の展示案内)トイレ案内	10分	サイン会(Q&A)
14:30	紙芝居『ちっちゃいこえ』 (岡村➡松富➡西村➡田中)	12分	アーサー・ビナード氏の話 (38分)
15:20	休憩(本の展示案内)トイレ案内	10分	サイン会(Q&A)
15:30	絵本『そもそもオリンピック』 (参加者によるリレー朗読)	12分	アーサー・ビナード氏の話 (38分)
16:20	質疑応答(次回の予告)	10分	
16:30	閉会・あいさつ・歌 (石丸山口児童館館長)	後片付け	撤収

アーサー・ビナード研究会 2020-7-20アンケート集計結果

参加者33名中アンケート回答者14名

- この朗読会+お話し会をどのようにお知りになりましたか？
はがき⑧ 新聞⑩ 知人④ ブログ① その他②
- 特に印象に残った朗読作品を○で囲んでください。(複数可)
父さんがかえる日まで⑩ ちっちゃいこえ⑨ そもそもオリンピック⑨
- 次のどれに興味がありますか？ ○で囲んでください。
リレー朗読⑦ 複数での分担朗読② 一人での朗読③ 朗読劇① 紙芝居⑥
- 次回の定例研究会(8月24日・月曜午後2時~4時 朗読カフェ+研究会、山口児童館)

にも参加なさりたいですか？ 無回答②

ぜひ参加したい⑩ できれば参加したい⑫ あまり参加したくない⑪

5. ご意見・ご感想をご自由にお書きください。(下記の〈自由記述〉参照)
6. 今回の新型コロナウイルスの感染拡大の予防対策について効果があると思われるものを○で囲んでください(複数可)。他に有効な対策があればお知らせください。
- 参加人数制限(100名収容のところ40名)⑪ 入り口での体温チェック⑦
マスクの着用⑨ 手の消毒⑦ マイクの消毒④ 座席の配置⑪ 換気⑪
- 他の有効な対策：個々の意識 窓を開けて風を通すこと
- マスクも消毒も三密もソーシャルディスタンスも必要なし。むしろマスクや消毒は有害であり、精神的にもストレスを生むのみ。肝心なことは、自分の免疫力を下げないことに注目すること。むしろまわりの人との濃厚接触で免疫力が高められる。それが大事。アーサーさんの話で、さらにそのことを確認しました。
7. よろしければ、氏名、性別、年代、メール・アドレスをお知らせください。
- 氏名：記入⑨ 無記入⑤ 性別：(男①・女⑪)
年齢(50代②・60代⑤・70代①・80代①)

〈自由記述〉

- ビナードさんの話にいつも発見があって、目からうろこなのですが、スタッフの方々がとても準備されていたので、とても感謝しています。どうもありがとうございました。(60代・女性)
- アーサーさんのお話は現代のコロナ禍のうそをあばく本当に大切な話だと思います。私にはよく伝わりましたが、日本人の多くにはなかなかわからないことかもしれません。
- ああ、来てよかったと思いました。笑顔・元気・勇気を頂きました。ありがとうございます。(60代・女性)
- アーサー・ビナードという人を知りえて、大変うれしく思いました。詩人というより哲人です！(80代・男性)
- 三作ともアーサーさんの視点の深いところを伺うことができ、目からウロコ、楽しいひとときでした。企画をありがとうございました。(60代・女性)
- アーサーさんの絵本の解説がとても良かった。短い話の中に、深い人間関係、家族の関係が組み込まれていると知り、自分の身の回りや人生の振り返りができたような気がした。英字版がほしい。(女性)
- とても有意義な時間で貴重な体験でした。スクリーンやマイクの消毒など細かい配

慮で気持ち良い会場だったと思います。(スタッフ・女性)

◎アーサー研究会お世話になりました。朗読の機会ありがとうございました。彼は、やはり熱い方ですね。(スタッフ・女性)

◎北原白秋がヒットラー・ユーゲント歓迎の歌詞を作ったと知ってがっかりしました。(70代・女性)

<自由記述のフォローアップ>

「北原白秋がヒットラー・ユーゲント歓迎の歌詞を作った…」とあるのは、1940年開催予定だった東京五輪の招致の際に「五輪の政治利用」が問題になったことに由来する。つまり、ナチス党のプロパガンダ手段と化し、大規模に開催された1936年ベルリンオリンピックに関係する。「あめんぼ赤いな ア、イ、ウ、エ、オ」で始まる「五十音」の作者、北原白秋は、1938年に来日するヒットラー・ユーゲントを歓迎するために「万歳・ヒットラー・ユーゲント」を作詞している。ビナード氏がその北原白秋のことを『そもそもオリンピック』との関連で話したのである。

『そもそもオリンピック』という絵本を書いたビナード氏は、5年前から2020東京オリンピックの開催は無理だろうと予言していた。コロナ禍のずっと前から、やる気もないのに2020東京オリンピックは無理だろうとラジオの番組でも言っていた。

それなら何故、この絵本を書いたのか、ビナード氏本人に直接聞いてみた。

もし、『2020東京オリンピック』というタイトルで絵本を書いていたら、延期や中止になったとき、たちまちその絵本は陳腐で惨めなものになってしまう。延期や中止になったとしても『そもそもオリンピック』という内容であれば、オリンピックの原点に立ち戻って考えてみようとする人は、必ずいるはずだということであった。

2020東京オリンピックの前宣伝として、NHKの大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」が2019年1月6日から12月15日まで放送された。平均視聴率は、8.2%というNHK大河ドラマ史上最低を記録した。物語の面白さが乏しかったことや主人公の金栗四三の思想性の薄さにもよるが、国民の関心の低さとやる気のなさを象徴しているとも言える。『そもそもオリンピック』では、三段跳びの織田幹雄が主人公になっており、「平和運動なら平和運動らしくするようにIOCは努力すべきです。国威高揚だ、メダルをとった、と大騒ぎするのは、オリンピック精神に反する」と述べている。

2021年1月18日に菅義偉首相は施政方針演説で次のように述べている。

「夏の東京オリンピック・パラリンピックは、人類が新型コロナウイルスに打ち勝った証として、また、東日本大震災からの復興を世界に発信する機会としたい」。

第2回目の緊急事態宣言下での演説がどれほどの実現性を持つかは疑わしい。

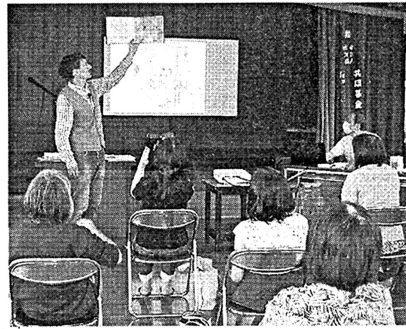
朗読とお話し会で交流

アーサー・ビナード氏を囲み

山口市 絵本や紙芝居の三作品

【記者通信】「アーサー・ビナード」を囲む朗読とお話し会が二〇日山口市開かれ約四〇人が参加した。絵本「父さんがかえる日まで」

「モーリス・センダック 作／アーサー・ビナード 訳、紙芝居「ちっちゃいこえ」／アーサー・ビナード 脚本、丸木俊・丸木位里 絵、絵本「そもそもオリピック」／アーサー・ビナード 作／ススキージ 絵の三作品を参加者が朗読して読み聞かせた。その後アーサー氏がそれぞれの作品について語った。絵本「父さんがかえる



アーサー・ビナードを囲む会 (20日、山口市)

父、赤坊の妹、正体不明のゴリンが登場する。

あるとき、アイダが妹をヒールを吹いて聞かせようと見せたら、妹はまたまたヒールを吹いて聞かせた。ゴリンが妹を連れ去り、妹はツルツルの

氷を置いていく。氷が解けて妹が連れ去られたことに気づいたアイダが空中遊泳をしてゴリンを探そうとしたがその空は

かき曇っていて見えない。そこには父の声が聞こえなくて、どうも向きかえ地上を見るも隠れ家を見つ

けることができない。父の声に従ってヒールを吹くとゴリンは溶けてなくなり、妹を助け出すことができたという話。

アーサー氏は、「ゴリンはどのページにも出てくるが冒険は気がない。妹はツルツルの氷が解けるまで連れ去られたことに気づかない。あなたとどうゴリンは関係ですか」と参加者に問いかけ、インターネットが普及し、AIが人々を監視

・管理する社会の危険性などに言及した。紙芝居「ちっちゃいこえ」は丸木俊・位里が描いた「原爆の凶」のなかから黒猫と少女、赤ん坊、おじいさん、ハト、犬、元気な細胞、壊れた細胞などを切りとり、広島原爆の惨禍を生きたひた黒猫が被爆した少女と赤ん坊、おじいさんの惨

状について証言している。と同時に、福島原発の細胞にまで拡大し、

原爆が普通の爆弾とは違って細胞を破壊し再生できなくさせる兵器であることを伝えている。

アーサー氏は、原爆投下直後に広島では「ドミニック」が起きたと証言し、被爆当時の夜から、無傷だった人たちに赤痢の症状があらわれたので、政府は感染制御策を施したのだという。こうして人々のあいだには「病気がうつる」と「パニックになった」といふのである。この辺のことは井

伏崎二の『黒い雨』にも描かれているという。「そもそもオリピックは一九二八年のラムステルダム・オリピックでアジア人初の金メダルを受賞した織田幹雄に

焦点をあてて描いているが、前段ではオリピックのそもそもの始まりである古代オリピックが全裸で競技するのがフェアプレイの基本であったのに対し、現代ではウェアと道具を手算がすべてを左右するという違いを描いている。

アーサー氏は、織田幹雄が一九〇五年に広島県安芸郡海田町で生まれ、一五歳で陸上競技に目覚め、「三段跳び」を極めてオリピックで金メダルをとり、スポーツを本当に愛した生涯を語ったことは、NHK大河ドラマ「いだてん」の金栗四三でも語られていない。織田幹雄の本質を語った名言を次のように紹介した。

「スポーツにはスポーツの論理がある。オリピックにはオリピックの考え方があって、それと大切にならなければならない。政府や周りの思惑でどうのこうのと左右されることはない。それが真けないようならやめる意味もない」

「ほくは国旗国歌はめめた方がいいと思う」「オリピックは平和運動だと思わない方がうが、何もやっていない。世界の若人が集って、この世から平和だといえようから平和だといえようが、これで平和も何もなかったものでは描いていない」

う、IOCは努力すべきです。国威発揚だ、メダルをとった、と大騒ぎするのは、オリピックの精神に反すると思います」アーサー氏は、この作品を四年前から手付け、今年の二月に発行した。二〇二五年から二〇二〇年の東京オリピックはできない」と発言していたことを、一九四〇年の東京オリピック中止の状況でも重ねて説明し、「コロナがなくとも経済的に東京オリピックはできなかつたと思うが、東京オリピックができようができません、そもそもオリピックとは何かという、物事の本質を描くのが文学者の使命だと考えている」とのべた。

左上の写真：山口智子氏作成の「こどもと本ジョイントネット21」より転載
上記の記事の中で取り上げられている『父さんがかえる日まで』に関しては、センダックの原作『OUTSIDE OVER THERE』と脇明子訳の『まどのそとの そのまたむこう』の三者を比較検討する形で「アーサー・ビナードの翻訳絵本」として林伸一が山口大学人文学部 異文化交流研究施設発行の『異文化研究』15号に投稿している。

<第8回 2020年8月24日(月)> 午後2時～4時 山口児童館 13名参加

以下の作品の紹介とリレー朗読が行われた。

『父さんがかえる日まで』のモーリス・センダックの原文とビナード訳、『まどのそととそのまたむこう』のわきあきこ訳を英語教師の助力を得て、読み比べてみた。

同じく新作『ウトウとクイナ』（三上寛・文／黒田征太郎・絵／アーサー・ビナード訳）についても、原文とビナード訳を比較して、味わってみた。



当日は、特別にChifumiさんによるハーブの演奏も披露された。

<第9回 2020年9月14日(月)> 午後2時～4時 山口児童館 9名参加

テーマ：『雨ニモマケズ』をアーサー訳で味わおう

『雨ニモマケズ』をアーサー訳の英語と日本語原文で味わおうという企画を英語教師の助力を得て、実施した。『ウトウとクイナ』をハーブの曲（Chifumi CD「Fairy」）とともに朗読してみた。

『亜米利加ニモ負ケズ』（2014、アーサー・ビナード著、新潮文庫）の中の「雨ニモマケズ」に関連する部分を参加者でリレー朗読した。『ダンデライオン』（ドン・フリーマン作／アーサー・ビナード訳）のリレー朗読と夢分析にも挑戦した。



<第10回 2020年10月26日(月)> 午後2時～4時 山口児童館 8名参加

テーマ：『日本の名詩、英語でおどる』（みすず書房）を味わおう

『日本の名詩、英語でおどる』（2007、アーサー・ビナード著）を題材にリレー朗読する形で、同書に含まれている以下の詩が読まれた。

中原中也「サーカス」、小熊秀雄「馬の胴体の中で考えていたい」、竹内浩三「はくもいくさに征くのだけれど」、まどみちお「やぎさんゆうびん」「リング」など。ビナード訳と対照しながら読まれた。



以上のように「アーサー・ビナード研究会」は、一年ほどで10回の例会を重ねてきた。その出身母体である「山口の朗読屋さん」と協力して、例会だけでなく、ビナード氏を招いての公開朗読会を行なった。今後も活動を継続してゆく予定である。

「山口の朗読屋さん」にとっても、「日本の昔話」や日本人作家の朗読などに特化することなく、視野を広げることに同研究会は、少なからず貢献しているであろう。

9. アーサー・ビナード関係図書の購入要望書

以下の要望書を山口県立図書館和田勉館長宛に送付した。書面での返信はなかったが、以下の4点の図書は購入され、閲覧・貸し出しができるようになった。

山口県立図書館 和田勉館長殿

貴図書館において下記の図書を購入し、閲覧・貸し出しができるようにして下さることを要望します。

- ① 『亜米利加二モ負ケズ』（2014、アーサー・ビナード著、新潮文庫）萩市・宇部市・山口市・山口県立大学などの図書館には所蔵されていますが、貴図書館には所蔵されていません。
- ② 絵本『父さんがかえる日まで』（2019、モーリス・センダック著、偕成社）宇部市・山口市など16図書館に所蔵されていますが、貴図書館には所蔵されていません。
- ③ 絵本『そもそもオリンピック』（2020、アーサー・ビナード著、ズキコージ画、玉川大学出版部）萩市・宇部市・山口市など15図書館に所蔵されていますが、貴図書館には所蔵されていません。
- ④ 絵本『ウトウとクイナ』（2020、三上寛著、今人舎）山口市など県内3図書館に所蔵されていますが、貴図書館には所蔵されていません。

以上4点を所蔵されることを切に希望します。もし何か所蔵できない理由があるのであれば、書面にて下記まで回答していただきたいと存じます。

2020年6月29日 山口の朗読屋さん 林 伸一

10. 報道関係への要望

山口の朗読屋さん（代表・林 伸一）から2020年11月4日付けで「ビナード氏の谷本清平和賞の授賞式は、11月8日とのことである。その際には、ぜひ報道各社のきめ細かい報道を要望し、期待したい」旨、各新聞社、放送局宛に要望書を郵送した。

11月8日の授賞式に関しては、中国新聞が11月11日付で「被爆者の声 多彩に表現 谷本清平和賞 ビナードさん表彰」との見出しで、写真入り記事を第20面に掲載している。テレビ新広島、広島ニュースTSS、Hiroshima Home Televisionなど、いくつかの放送局が受賞の件を報道している。

残念ながら、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、山口新聞、宇部日報などは、11月12日までのところ、ビナード氏の谷本清平和賞の授賞式関連の記事を掲載していない。授賞式とは切り離し、別の形でもいいから報道してほしい。

11. 今後の課題と問題点

新型コロナ・ウイルスのせいで、2020東京五輪大会は、2021年に延期された。しかし、果たして2021年に大会は、開催されるのだろうか。ようやくワクチンの開発は、報道されるようになってきたものの、いまだに特效薬はなく、国民的な期待が盛り上がらない中で、2020東京五輪開催は無理だろうというムードが漂いはじめている。

東京五輪に限らず、目先の問題にばかりとらわれていないで、ピナード氏のように「そもそも」論をおおいに発信して、諸問題をとことん議論して、根本から考え直す時期にきているだろう。そうすれば、今後の問題解決策を模索して行けるだろう。

2021年の東京オリンピック大会も誰かが号令をかけて、「立ちましょ喇叭（らっぱ）で、タ、チ、ツ、テ、ト。トテトタッタと飛び立った。」（北原白秋「五十音」）という具合に調子よくいくであろうか。

新型コロナウイルス対策のために、マスクや検温、手の消毒が通行手形のように、三密を回避するためにイベントが中止になったり、延期になったり、参加人数を制限したりしている。ソーシャル・ディスタンスをとることが呼びかけられ、ステイホームのお達しを忠実に守り、家に引きこもる人も多い。

田んぼのあぜ道を一人で歩く人もマスクをしていたり、一人で自動車を運転しているのにマスクをしていたりして、精神的にもストレスを生むこととなる。巣ごもり生活が長引き、鬱状態になったり、認知症がひどくなったりする精神的に有害な事態も発生している。肝心なことは、自分の免疫力を高めることであろう。たとえば、朗読会やお話会などに参加することで、自己免疫力を下げないことに心がける必要がある。

社会的活動でコミュニケーション力を高め、まわりの人との接触を恐れず、免疫力を高めていくことで、今日の局面を乗り越えていくことができるのではないだろうか。

【参考文献】

林 伸一（2020a）「アーサー・ピナードについての研究－絵本の朗読と図書館の役割を考える－」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第70巻、pp.49－69

林 伸一（2020b）「朗読会の可能性を考える－ボランティア・グループ『山口の朗読屋さん』の視点から－」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第43号、pp.132－146

【謝辞】山口新聞と長周新聞の記事の本稿への転載に関して、それぞれ転載を快諾していただいたことを感謝致します。また、アーサー・ピナード氏の写真の提供をしていただいた「こどもと本ジョイントネット21」の山口智子氏に感謝致します。